

## 1 音楽科における「考える子」

音楽科では思いや意図を相手に伝えるとき、言葉のほかに音や旋律や和声を使う。相手の感覚的・感情的な部分に言葉を超えてダイレクトに投げかける。投げかけられた相手がそれをどう受け取るかについては、相手の感性によってその深さと理解度が変わる。補足的に言葉があったとしても表現手段の主たる部分は音である。音楽科における「考える（子）」には相手に思いや意図が伝わる表現を、言葉だけでなく音も使って模索することも含んでいる。

相手に思いや意図が伝わる表現をしようとするとき、まず相手が表現していることをきちんと受け取る必要がある。つまり聴くことだ。また、自分の思いを正確に表現するためには音楽的な基礎・基本の能力が不可欠である。考えることの素地ともいえる。この二つの力を育てることに力点を置き、よりよい表現を求めて音楽の楽しさを味わわせたい。

以上のことから、音楽科における「考える子」を次のようにとらえる。

音楽の美しさや楽しさを味わうために 友だちとのかかわりの中で 自分の表現をよりよく変えていこうとする子

## 2 問いがつながる音楽科の授業

音楽科の授業で、言葉や音・旋律などから表現内容を正確に受け取ろうとするとき、集中して聴くことが行われる。音色・テンポ・和声の響き・ダイナミクス・構成や編成・全体的な雰囲気など、音楽の要素で分析を行い、聴き取る。聴き取ったことに対して自分はどうか感じたのか、自分のフィーリングも正確に捉えなくてはいけない。自分のフィーリングの中に心地よいのかそうでないのか、また「これでいいの?」「なぜ?」「どうなっているの?」「どうしたらいいの?」のような感覚が生まれ発信したとき、それは「問い」になる。「問い」が生まれみんなでも共有することにより、発問によって示された子どもの意識の方向性のベクトルが題材の終着点に向けて一旦揃い、またそれぞれの思いに沿って分かれ終着点に向かって進んでゆく。

## 3 「問いがつながる授業」への手だて

### (1) ハンドサインを使った活動

ハンドサインを使って階名唱するとき、視覚と聴覚の両方を使って歌う。旋律を正しい音程で表そうとするとき、音高感が必要になる。音を出してから高かった低かったと修正するのではなく、移行する音程の幅を瞬時に感覚で捉えてから音程を変えることができると、正確な移行がしやすくなる。二声（あるいは三声）のハーモニーづくりを継続することにより耳に入ってきたハーモニーの響きが美しいのかそうでないのか、正しく判断ができるようになる。また8小節程度のレターサイン（簡易譜）を板書したものをカノンにして階名唱し、聴きながら歌う能力も高めてゆく。すると響きが美しくないときに自ら「何がよくないのか?」「ではどうすればよいのか?」と問いをもつことができるようになる。

### (2) 音楽の要素を焦点化して聴く活動

友だちの演奏を聴くとき、聴くポイント（リズム・音色・音の流れ等の要素）を焦点化し自分の演奏と比べることで「〇〇とを感じるひみつは何?」と問いが生まれる。また自分と友だちの演奏を客観的に捉え、良いところは「どうしたらあんなふうに見えるのか?」そうでないことは「どうすれば良くなるのか?」という問いが生まれ、かかわりながら学ぼうとする。

### (3) 教師による範唱や範奏

音源ではなく、生の演奏を児童に提示することにより、どんなふう演奏したいかというめぐず具体的なイメージをもたせ、必要感にフィットしたものを示すことができる。そこから「どうすれば自分（たち）の演奏がイメージに近づくのか?」という問いをもたせることができる。

## 4 実践例

### (1) ハンドサインを使ったハーモニーづくり

#### ① 1～3年生の実践から

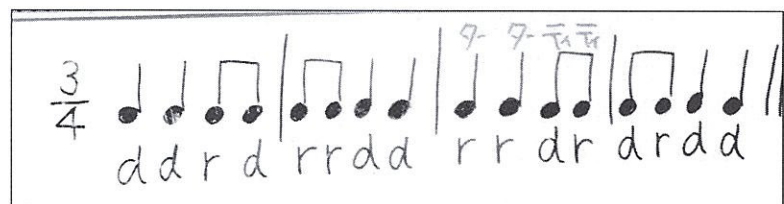
4月から1～3年生の音楽科の授業にソルフェージュの帯活動としてハンドサインを使った階名唱を導入した。まずは実音でハ長調のスケールを正確に階名唱できるように頭声発声の指導も含めて活動を行った。全音と半音の違いを感覚的につかめるように「ミ～ファ」「シ～ド」の半音の音程は特に留意し「心地よい音程」「安心感のある音程」の定着を図れるように努めた。具体的には教師が何種類か歌い、どれが「心地よいか」を何度も感じ取る練習をした。また音を取るときは音叉を使用し、平均律であるピアノの使用は極力避けて、純正調での「心地よさ」の定着も図れるように努めている。ハ長調のスケールの階名唱に慣れてきたら8度・5度・2度・3度・・・といろいろな音程を取る活動も加えて、音高感の育成にも着手している。1年生の活動でも、ハンドサインを使った階名唱をすると「あれ？今の声、低すぎじゃない？（高すぎじゃない？）」という問いが生まれるようになってきた。

#### ② 2年生の実践から

2年生では、実音に固定されずにいろいろな調性感をもたせるためにハンドサインを使った「移動ド」での階名唱の活動も始めた。また歌唱だけでなく鍵盤ハーモニカを使用した活動でも『かっこう』をいろいろな調で演奏するために『白かっこう』、『黒かっこう』、『パンダかっこう』をみつける活動として取り組んだ。白い鍵盤だけで弾ける2種類の『白かっこう（ハ長調、ト長調）』、ほとんど黒い鍵盤を使う『黒かっこう（嬰へ長調）』、白と黒の鍵盤が入り混じったいろいろな『パンダかっこう（ヘ長調、ニ長調・・・）』を、運指を変えずに指番号を歌いながら鍵盤上で音を探していき、「ド」はいろんな鍵盤から始めることができるという感覚を実感した。音楽的な基礎基本の能力を広域的に身につけさせている。

#### ③ 2，3年生の実践から

音高感が少ずついてきたら、4（あるいは8）小節程度の簡易譜（レターサイン）を見てリズム読みをして、ハンドサインをつけて歌う活動も取り入れた（資料1）。使う音の数を少なくして、安定感のある音程で歌えるように取り組んだ。歌う内容を可視化して、見通しが持てるようになり「歌いやすい。」という反応があった。はじめの方ではしっかり取れている音程も、4小節目ぐらいになると2度の幅が甘くなっていく傾向にあり、子どもから「最後の方、何か変じゃない？」「低くない？」という問いが聞こえるようになってきた。また教師が1小節遅れで歌ってカノンにする活動にも取り組み始めている。（（2）③参照）和声のハーモニーづくりと平行して、ペンタトニックの音階（5音階 so la do re mi）を用いた旋律できれいなカノンを響かせることを目指し、充実した基礎・基本の能力の定着を図っている。



資料1 レターサイン（簡易譜）の様子

#### ④ 3年生の実践から

3年生では、上記の活動に加えてハンドサインを使ったハーモニーづくりの活動も進めている（資料2）。「聴きながら歌う」ということはとても難しいことなので、最初は聴くか歌うかどちらかに焦点化できるように、教師とパートを分けて（教師が先に歌うなら子どもは後から追いかける等）歌う役か、それを客観的に聴いて評価する役に分けて活動した。両方の活動に慣れてきたら子どもを半分に分



資料2 ハンドサインの様子

けてハーモニーをつくり、「聴きながら歌う」ことにも徐々に慣れるようにしていった。春先には「歌うことで精一杯で、とても聴けない。」「よくわからない。」と反応していた子どもが、一学期の終わりになると「〇と〇の響きがきれいだった。」「〇と〇のとき私たちの音が低く感じたけど、どうかな?」「上ずっている所もあったと思うのですが?」など部分を正しく評価すること（問うこと）ができるようになってきた。さらに「どうすればもっと美しい響きにできるのか?」という願い（問い）を、聴いて感じて考えながら探っている。「聴かなければちゃんと歌えない、つまり歌うことは聴くこと」の意識を、当たり前のこととして捉えられるよう実践を重ねている。

## (2) 音楽の要素を焦点化して聴く活動

### 3年生「リコーダーとなかよし」の実践から

#### ①『ポエム』の取り組み

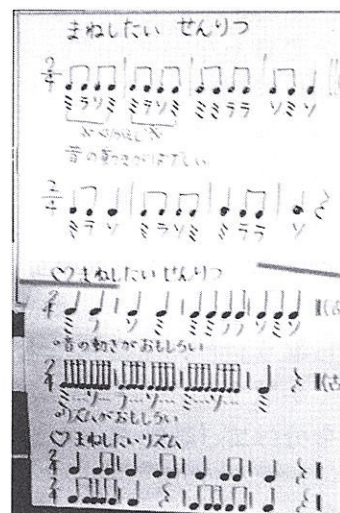
リコーダー導入時に徹底して指導するのは、運指とタンギングと息のコントロールである。これらの技能の定着を音楽的に図るために、導入初期に「ポエム」という曲に取り組んだ。易しい同じリズムのフレーズを四回繰り返す「ポエム」はコード進行が変化に富んでいて美しく、一つの音しか使わないのにフレーズを感じながら飽きずに取り組むことができる。子どもは最初、息のコントロールが足りなくて曲を吹き飛ばすように荒く吹いていたが、音色やタンギングや演奏から受ける感じなどに焦点化して聴くうち、少しずつ乱暴だという自覚が芽生えてきた。「どうすればもっときれいに演奏できるのかな?」という問いが生まれ、「ホールがちゃんとふさがっていたかな?」「タンギングは忘れないでできているかな?」「息はコントロールできているかな?」と要素に留意して演奏するようになり、どんどん音楽的になっていった。曲が仕上がってくると「今の音色や吹き方は『ポエム』の雰囲気合っていたかな?」と、さらに音楽的な問いが生まれてくるようになった。

#### ②旋律づくりの取り組み

ペンタトニックの音階（5音階 so la do re mi ソプラノリコーダーではレミソラシ）からいくつか音を限定して選び、それらを使って即興演奏での旋律づくりの活動を行った。バスマリンバを使ったオスティナートの伴奏に乗って、4拍2小節分の旋律をリレーのように全員が繋げて演奏した（資料3）。その中で友だちのまねしたい演奏をピックアップし「おもしろいと感じるひみつは何だろう。」と問いを持った。「〇〇さんのせんりつは、どうしてそんなおもしろいの?もう一回きかせて!」と子どもどうしのかかわりも活発になり、ひみつをさぐるために演奏の内容を板書し「音の動き」と「リズム」に分けて焦点化して捉えた（資料4）。「〇〇さんのせんりつは、こんなに細かいリズムだったんだね。」「〇〇さんのせんりつのは、同じパターンのかえしがあ



資料3 つくった旋律をリレーで演奏している様子



資料4 リズムと音の動きに焦点化した板書

るんだ。」「〇〇さんのせんりつの音の動きはこんなにはげしかったんだね。」「この音の動きがおもしろいんだよな。」など、様々な感想が生まれた。そしてそれらの要素を自分の演奏に取り入れることでおもしろさのひみつを実感し、自分なりの「さらにすてきな演奏」をめざすと、それぞれの演奏の内容が充実していった。

### (3) 教師による範唱や範奏

#### ① 1～3年生のハンドサインを使ったハーモニーづくりの実践から

ハンドサインを使った階名唱を行うとき、教師が先に歌い、それを聴いて復唱して子どもが歌うというパターンで活動を行った。出したい声の音色や音程のイメージが具体的に持て、地声や怒鳴り気味の子どもの「先生と何かちがうな。」と気づいたとき、「何をどうすればよいのか？」という問いが生まれた。具体的に目指す声の出し方がいつもそばにあり、いつでも歌声のサンプルをもらえる安心感と、やればできそうな期待感と「どうすれば先生と同じ感じのひびきで歌えるのか？」という願いによって、考えて行動してより良くなるというスモールステップを積んできた。

#### ② 3年生のカノンの実践から

4小節の旋律を子どもが覚えて歌えるようにするために、教師の後を復唱して歌うパターンで練習した後、1・3小節は子どもが歌い、2・4小節を教師が歌う（またはその逆）という練習を行った。「まるでひとりの同じひとが歌っているように先生と旋律を受け渡しましょう。」と課題を出すと、子どもは教師の歌う旋律に集中し、歌う場所を交代したときに聴いたのと同じように歌おうと発声や音程の取り方に工夫を始めた。自分の中で「どうすれば同じような感じで歌えるのだろう。」と問いが生まれていた。また教師が一人で一つのパートを引き受けて、子どもの歌う旋律から1小節遅れで歌ってカノンにすると、「do re」の2音2度のカノンでも「美しくて不思議な世界」が展開された。子どもは自分たちの歌ったカノンに対して「すごい！」「なんだかふしぎな世界にいるみたい。」「どうしてこんなにきれいになるの？」と驚いていた。ところが教師とパートを交代して子どもが後から歌うとカノンとして成立せず、子どもには「なぜ？さっきより難しい！」「ものすごく、先生につられてしまうのはなぜ？」と問いが生まれていた。

#### ③ 3年生のリコーダーの実践から

ソプラノリコーダー導入時の最初に、教師によるデモンストレーションの演奏を行った。クライネ・ソプラニーノ、ソプラニーノ、ソプラノ、アルト、テナー、バスのリコーダーを演奏し、それぞれのリコーダーの音色や特徴、その役割、また演奏する楽しさを生で伝え、練習する期待感をもたせた。またソプラノリコーダーのリコーダーの中での位置づけ（ソプラノであること）も説明した。

タンギングや息のコントロールを中心とした指導の際にはハンドサインを使った階名唱のときと同じように教師の吹いた音の後を復唱するように子どもが吹いた。「先生のまね」をして同じように吹いているつもりでも、どうしても息のコントロールが足りずに音が荒くなる子どもがいて、「どうすればきれいな音で吹けるのだろう。」と困っていた。「もう少しやさしく吹いてみれば？」とか「息が強すぎるんじゃない？」など、まわりの友だちがアドバイスする場面がよく見られた。

## 5 今後に向けて

子どもに「音楽的により美しいもの」をめざさせようとするとき「美しい」とはどういうことなのかを、子どもが正確に理解して具体的にもてていないとめざすことができず、そこに「どうやって？」という問いや考えももつことはできない。日々の授業の中で継続的な実践を重ね、正確で豊かな感覚を身につけさせることにより、質の高い問いを発せられる子どもに育てていきたい。ハーモニーづくりやカノンは1～3年生で今後も段階を踏みながら継続していく。

## 1 音楽科における「考える子」

音楽科は音楽のよさや楽しさを感じ、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育む教科である。音楽のよさや楽しさを感じるためには、そのよさや楽しさの根拠となる、様々な音楽要素に気付き、実感をもって理解するための聴く力をつけることが大切である。聴く力とは、聴いて感じたことをどうしてそう感じたのか、「強弱」「速さ」「リズム」「旋律の重なり」などの音楽の要素に結びつけられる力である。聴く力を育むことで、音楽のよさ、楽しさが様々な音楽の要素によることに気付き、それを自分の思いや意図をもった表現にも生かしていくことができる。さらに聴き取ったり、感じ取ったりしたことを交流する中で、自分の音楽表現を高めていくことができると考える。

また、自分の思いや意図をもって表現するための基礎基本となる力をつけ、よりよい表現をめざしたい。以上のことから、音楽科における「考える子」を次のようにとらえる。

音楽の美しさや楽しさを味わうために、友だちとのかかわりの中で、自分の表現をよりよく変えていこうとする子

## 2 問いがつながる音楽科の授業

音楽科における「問い」を以下の二つのようにとらえる。

一つ目は感じ取ったことを自分たちの表現に生かそうとする問いである。子どもが音楽と出会い、感じた思い「楽しい感じだな。」「悲しそうな感じがするな」を「どうしてそんな感じがしたのか?」「この音楽が〇〇なのはどうしてかな? (よさは何か?)」「この曲の感じが途中で変わったのはどうしてかな?」という問いにつながり、さらに「私たちの演奏とどこがちがうのかな?」「どうしたらこんな表現ができるのかな?」と自分たちの表現に生かそうとする問いである。

二つ目はよりよい表現を目指し、追求して行く過程で友達と交流しながら「もっとこうしたら?」「ここを工夫したら?」「どうしたらそんな音が(声が)?」とつながっていく問いである。「こんな演奏をしたい。」という思いをもつようないい音楽や演奏と出合わせ、それに近づくための問いを引き出し、聴く力を使い、友だちと新たに生まれる問いを交流しながらゴールの演奏に近づけていきたい。

## 3 「問いがつながる授業」への手だて

### (1) 音楽を形づくっている要素を焦点化する

一つの音楽はさまざまな要素や仕組みで成り立っている。その楽曲で子どもにどの要素を学ばせたいのか、教師がしっかりと意識し、その要素に気付き聴き取る力を身に付けさせたい。音楽を形づくっている要素を音や演奏と結びつけて理解し、言語化することまたカードや楽譜など可視化したものを共有することで、さらに問いが明確になると考える。

### (2) ゴールの演奏のイメージを明確にもたせる

表現活動において、自分たちがめざすゴールの演奏はどんなものかをはっきり意識させたい。したがって、教師は子どもの模範となる演奏を的確に選ぶ必要がある。

### (3) 聴いたこと聴き比べたことを交流させる

自分の演奏と友だちの演奏、そして自分たちの理想とする演奏を聴き比べ、「どこが違うのか?」「もっといい表現にするために何が必要なのか?」という子どもの問いを交流させることで新たな表現の工夫に気付くことができる。録音するなど自分の演奏を客観的に聴く機会ももたせたい。

## 4 実践例

### (1) 音楽を形づくっている要素を焦点化する

#### 4年生「音の重なりを感じ取ろう」の実践から

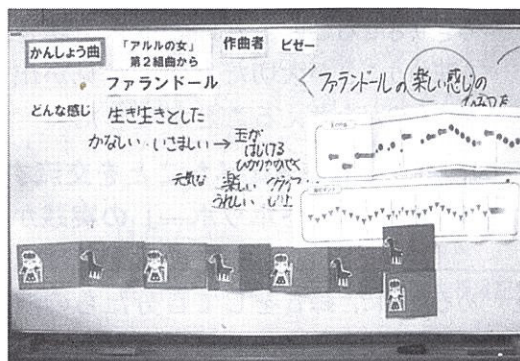
鑑賞曲「ファランドール」(ビゼー作曲 組曲「アルルの女」第2組曲から)を聴いて子どもが感じた「楽しい感じ」「元気な感じ」「生き生きとした感じの」のひみつは何かを見つける授業である。曲の特徴の一つは、音楽を形づくっている要素である二つの「旋律の重なり」である。一つ目の旋律は「王の行進」二つ目の旋律は「馬のダンス」である。この二つの旋律の重なりから生まれる曲の面白さを感じ取らせるために、「王の行進」チームと「馬のダンス」チームに分かれ、自分の旋律が聞こえた時に立つ活動を取り入れた(資料1)。曲の最初の方は、速さや調性の変化はあるものの二つの旋律の特徴がわかりやすく、子どもはあまり迷うことなく、自信を持って立ったりすわったりの活動をしていた。



資料1 指で自分のチームの旋律を確認しながら立っている姿

曲の後半、速くなった「王の行進」で立てなかった子どももいたが馬チームの子どもに立つように促されていた。二つの旋律が重なった部分では、立っている子どもとすわっている子どもが、はっきり分かれた。「えっ? 何で〇〇さんはここで立っているの?」と不思議な顔をしている子ども。「ほらっ、立つよ!」とすわっている子どもに対し、立つように声かけをしているが、「分からないなあ」という顔ですわっていた。問いが生まれた時であった。

そこで、二つの旋律が交互に現われたり重なったりすることをはっきりさせるために、旋律の流れをカードにして可視化することにした(資料2)。「王の行進」の旋律を赤のカード、「馬のダンス」の旋律を青のカードにして曲を聴きながら、ホワイトボードに提示していった。提示して可視化することで、改めて二つの旋律が交互に出てくることに子どもたちは気づいていた。二つの旋律が重なる部分では、まだ重なりが聞き取れない子どもに対し「ほら! ここ! ターンターンターン、タタンタタンタタン・・」と音楽に合わせて旋律を口ずさみながら旋律の重なりを示したり、指で旋律の動きをとりながら説明したりする姿が見られた。問いがつながったことで、旋律の重なりを聞き取れなかった子どもも聞き取ることができた。旋律が重なることによって「前よりもり上がって楽しい感じ。」「クライマックスみたいだった。」「最後は王が馬に乗って凱旋してきた感じ。」など曲の面白さを感じ取ることもできた。音楽を形づくっている要素「旋律の重なり」に焦点を当てたことによって、聞く視点がはっきりし、さらに可視化することで重なりを実感することができた。「ファランドール」の曲の面白さは「旋律の重なり」だけではない。次時では、音楽を形づくっている要素「速さ」「強弱」「調」の一つ一つに着目しながら、「ファランドール」が様々な音楽を形づくっている要素を取り入れて工夫して作曲されていることやその面白さを味わうことができた(資料3)。



資料2 二つの旋律の流れを可視化したホワイトボード

「ファランドール」をかんしょうして・・・
4年1組( )
ファランドールは人が人がかわたりして て新しい曲も馬のころかたつたん犬まぐ なをいってだんせんまより上げていらてはるかんじ がしていた同じかんじたまきこえていたけど ちよとすつちがていてはやくなっていた り調がかわてり馬と至がカさなっていた りいろいろがわてててーてもくううしてある 曲たなよと思ひました。

資料3 「ファランドール」の音楽を形づくっている要素を聞きとった後の感想

「ファランドール」をかんしょうして・・・
4年1組( )
ファランドールをかんしょうして、すごい曲だな あと思いました。ふつうに聞くと、ふつうの 曲ですが、どこで変化したかを考えて 聞くととても工夫されているんだなあと 思いました。速さなど色いろなことみ んなで見つけ、そこがどんな感じだ たかを出し合いとてもおもしろかった です。ファランドールのひみつは、速さや 強弱などに、かわるということも分 かりました。ひみつは、それだけでは なく、重なりもあるということも分か りました

(2) ゴールの演奏のイメージを明確にもたせる

4年生「パレードホッホー」の実践から

高木あき作詞／平吉毅州作曲「パレードホッホー」は、はずむようなリズムでつくられている前半アと、のびやかなリズムでつくられた後半イの二つの旋律が、対照的な特徴を持っているため、旋律が重なり合うおもしろさを感じ取りながら歌うことができる。

「パレードホッホー」の範唱のCDを聴き、この曲も前述の鑑賞曲「ファランドール」のように二つの特徴の違う旋律が重なることで、曲のもり上がりや楽しい感じが表現されていることを感じ取った。「パレードホッホーでも、旋律の重なりによさを表現するにはどうしたらいいだろう？」という問いが生まれた。曲調に合った明るい声を出していくこと、言葉をはっきりさせること、互いの歌声を聴き合い、気持ちを合わせて声を重ねる楽しさを歌いながら味わうことが大切だという意見が出された。自分たちがめざすゴールの演奏のために何が必要なかを考えることができた。

(3) 聴いたこと聴き比べたことを交流する

4年生「パレードホッホー」の実践から

「パレードホッホー」の歌唱では、自分たちがめざすゴールの演奏に近づいているか確かめるために、録音をして自分たちの演奏を客観的に聴いてみた。

「CDの演奏とは何かちがうなあ。」「どこを直したらいいのかなあ。」「旋律が重なる楽しさが出ていないなあ。」と自分たちの演奏に満足していない子どもがほとんどだった。以下のような話し合いが聞かれた(資料4)。

C1 : 二つの旋律が重なった時に、本当はもり上がって楽しい感じを出したいのに、逆に声小さくなっていると思います。 T : 二つの旋律の特徴はどんなところかな？ C2 : イの「とおい～そら～うかぶ～くも～」のところは音が伸びています。 T : のびたところはどんなふうに歌ったらいい？ C3 : しっかり音をのばして、なめらかに歌えばいいと思います。 C4 : イが伸びている時に、アは「パラタタタ」とか「パヤパパパ」と短い音符なのでしっかり切って、ちがいを出せばいいと思います。
--

資料4 自分たちの演奏を客観的に聴いた後の話し合い

その他、バランスや二つの旋律の違いだけではなく、言葉のはっきりしないところ、音符の長さ、声の出し方などにも自分たちの不足を挙げていた。自分たちの演奏をゴールの演奏と聴き比べながら客観的に聴き交流することは、さらにいい音楽表現に向かうために有効であった。

#### 4年生「歌のにじ」の実践から

佐田和夫作詞／岡部栄彦作曲「歌のにじ」は美しいリコーダーパートを伴った歌唱曲である。リコーダーによる副次的な旋律の終わり4小節をグループでつくる旋律づくりの活動をした。旋律をつくる際に気をつけることとして「歌しやすい旋律」とした。各グループで話し合い、音を出しながら拡大楽譜に音符を書き込んでいった(資料5)。

あるグループの話し合いの様子である(資料6)。子どもたちは実際音を出しながら、歌いながら「歌しやすい旋律」とはどんな旋律なのか?を友だちと話し合い、音の動きが大きくならないように近くの音を選んだり、自然な音の動きを考えたりしていた。

話し合いの後、それぞれのグループの演奏の聴き合いをした。

「歌」「リコーダー」「演奏を聴く」の3つのグループに分かれてそれぞれのグループを全員が体験できるように交替した。「歌しやすい旋律」でつくった自分たちの旋律が歌にしっかり合っ、他のグループからも「歌いやすくてきれい。」とほめられるグループや、「ちょっと高い音が続いて歌がかき消されてしまうところが残念。」と、課題が残るグループもあったが、お互いに聴き合っ感想を交流することは、さらにいい音楽表現に向かうために有効であった。



資料5 グループで旋律づくりをする姿

- C1: 何の音から始める?  
C2: 前の音がソだから、歌いやすいってことを考えるとソから始めたら?  
C3: ソは歌のソと重なっているから違う音がいいんじゃない?  
C1: 全部同じ音にしたらどうなるかな?  
C2: 同じ音ばかりだと歌いやすいけどつまらないよ。ミの音にしてみたら。  
C1: (リコーダーで音を確かめながら)ミーソードって歌いやすいし動きも自然だね。

資料6 聴いたことを交流した授業記録

## 5 今後に向けて

鑑賞活動、表現活動において「どうしてこんなに楽しい感じなのかな?」「もっとこんな風に演奏するにはどうしたらいいのかな?」など問いが生まれる場面はあった。しかし、その問いが子ども同士つながっていくまでには、なかなか至らなかった。教師がつないでしまったり、つながったとしても、授業の中では一部の子どもだけのつながりしか見取れなかったり十分ではなかった。また、「問い」が生まれつながりそうになるのだが、教師の意図していない思わぬ場面であったり、1時間のねらいに達するために必要な問いのつながりであったのか迷ったりすることもあった。

教師が1時間の中で、ねらいを達成するためにどの場面でどんな問いのつながりを期待するのかをもっと明確にしておかなければならない。



## 子どもの心がつながるときめきのある音楽科の授業をめざして

音楽科 徳田 典子

### 1 音楽科における「考える子」

子どもは、様々な音楽との出会いの中で、その音楽のよさやおもしろさを感じ取ることから始める。音楽科では、音楽活動を通して、楽しく、質の高い音楽を求めていこうとする子をめざしたい。

音楽科における「考える子」を育むために、聴く力に焦点をあてて、研究する。音楽を聴く経験は、音楽のもつ美しさや楽しさを味わう力をつけるだけでなく、友達の音楽性を認め、心がつながる経験を生むことになる。友達の演奏表現を聴き取ることは、自分の表現との違いに気付き、自分の表現をよりよく変えていこうとするきっかけとなる。また、様々な音楽を分析して聴く力があれば、その音楽の美しさや楽しさのしかけをあきらかにし、自分の音楽表現に生かしていける。子どもが音楽科の授業で、構築した基礎・基本をもとに自分の理想となる音楽にむかう過程で、よりよい表現を求め、考える子どもの姿をめざす。

以上のことから、音楽科における「考える子」を次のようにとらえる。

音楽の美しさや楽しさを味わうために 友達とのかかわりの中で 自分の表現をよりよく変えていこうとする子

### 2 問いがつながる音楽科の授業

問いがつながる音楽科の授業には、「やってみたい」「つくってみたい」というときめきのあるあこがれの音楽に近づくために、「どうして、こんなにいい演奏になったの？ひみつを教えて」を常に問い続け、表現を変容させていく過程が必要である。そのためには、子どもが感じずにはいられない、心の内側に問いが生まれてくるような授業を構想することが必要だと考える。子どもは心動かされる音楽に出会ったとき、その音楽からもたらされる心地のよさに感動する。また、この感動を与えているのは、その音楽を形づくっている要素の何かを問う。聴き比べの活動などで、わからないことがあきらかになった子どもは、楽曲の美しさやおもしろさの意味について理解することができ、さらに自分のめざす音楽に近づくには、何をどうしたらよいのかという問いをもつことになる。問いがつながってゴールに向かうということは、ゴールには子どもなりの心がつながった理想となる音楽や表現がある。

### 3 「問いがつながる授業」への手だて

#### (1) 聴き比べの活動を取り入れる

自分はこんな表現にしたいという思いをもたせて演奏することは、友達の演奏を聴いた時に相違点や共通点に気付くことになる。自分の表現をよりよい方向に変えていくためにはどうしたらよいのかという疑問や、他の演奏との聴き比べや考えの違いから問いが生まれる。

#### (2) 心動かされる音楽と出合わせる

心がときめき、揺さぶられるような音楽との出会いは、授業の中で今まで積み重ねてきた表現との圧倒的な違いに気付くことになる。子どもには感動をもたらす力のある音楽と出合わせなければならない。感動は新しいものを創造するポジティブな思考を生み、さらなる問いがつながる。

#### (3) 学習形態の工夫をする

学習の内容によって、問いがつながるための学習形態を設定する。イメージが共有化されたグループや演奏のパート、座席などから学習の課題にせまる必要感のある問いが生まれる。

## 4 実践例

### (1) 聴き比べの活動をさせる

#### 6年「リズムに親しもう」の実践から

この題材では、楽曲に合わせて、一人一人が創意工夫してドラムスの演奏をすることをめあてとした。

そこで、この題材における聴き比べの活動の第一段階は、まず全員が同じ8ビートのパターンを演奏して、友だちの演奏と自分の演奏との相違点に気付くこととした。パターンを正しく演奏することはもちろんのこと、ここでは特に、ベースドラムやタム類などドラムスの各部分の楽器をバランスよく演奏して、心地のよいサウンドにする必要がある。

授業では、「〇〇さんの演奏がとていい。」という声が挙がると、子どもからすぐさま「〇〇さん、演奏してみて…」と実際に演奏が始まった。「すごくいい音で気持ちいいね。どんなところに気をつけているの？」と自然に問いがつながり、「私は、特にベースドラムのつま先の置き方に気をつけて演奏し、全体のバランスも考えているよ。」と答えた。演奏の仕方もサウンドもじかに体感していることもあり、自分の演奏のどこをどんなふうに改善したらよくなるのかを、友だち同士でアドバイスしながら、自分の演奏をよりよい演奏に変容させていくために、聴き比べをくり返した。

聴き比べの活動の第二段階としては、演奏のフィールインやソロの部分を、ドラムスのタム類を自由に使い、自分なりにアレンジをして演奏することにした。ここでは、ドラムス演奏の学習でのペアの聴き比べの活動を意識した。指定した1小節・4拍のフィールインや2小節・8拍のドラムソロを演奏するには、その楽曲に合うリズムを考えることやそのリズムを高低差のあるドラムスのタム類やシンバルを使用して、友だちがどのようにまとめるのが興味深いところであり、聴き比べの活動のおもしろさでもあった。練習台で自分の考えたリズムの聴き合いをして、アドバイスし合うことは、楽曲に合わせてドラムスを演奏する順番が来るまで、いろんなパターンを試して演奏することもできた。また、友だちの考えた演奏を参考にして、演奏の創意工夫をすることは、ドラムスのタム類の使用の仕方とリズムの組み合わせなどに、新たな気付きが加わり、自信をもった考えで演奏するきっかけとなった。

聴き比べの活動の第三段階としては、ペアのそれぞれが考えた演奏を組み合わせ、一つの演奏にしたときに、どのような演奏表現になるかをイメージさせて、創意工夫させた。「私は16ビートのパターンを演奏するよ。」「僕は8ビートの基本形をパターンに選ぶから、ベースドラムは同じパターンに揃えるとノリがいいと思わない？」とペアの中での問いがつながり、実際に演奏を試すことで、組み合わせの修正をくり返した。また、「私はソロにはシンバルとスネアドラムを組み合わせたいよ。」「なぜ、その組み合わせにしたいの？」と友だちの考えを聞くことで、さらに自分の考えの共通点や相違点が明らかになり、自分たちがこの楽曲に合う演奏をするには、さらにどんな創意工夫が必要なのかを問う場面が随所にみられた。

また、模範となる子どもの演奏を、教師が選んで指し示し、自分の演奏と聴き比べさせた。奏法や音のバランスが良く、二人のリズムの組み合わせに工夫があり、楽曲がより楽しく感じられる演奏に出会ったことは、自分がペアの友達とこれからどんな工夫をしたらよいか気付かせる手だてとなった(資料1)。



資料1 演奏の聴き比べをしている様子

## (2) 心動かされる音楽と出合わせる

### 5年「ビッグバンドをめざそう」の実践から

この題材の第一次では、『シング シング シング』の演奏の聴き取りをして、曲全体の感じをつかませた。また、楽曲と出会った初めの印象を大切にするために、曲から受ける印象や特徴についての感想を書かせた。その聴き取りで感じていたことを明らかにするために、二次では、映画「SWING GIRLS」の映像を視聴させ、さらに、たくさんの要素に気付かせたいと考えた。映像は、ストーリーの見せ場ということであって、演奏者と観客との一体感のある場面に、子どもは引き込まれていった。鑑賞する様子も、動作化をしながら楽しんでいった。この題材では、自分たちのグループがめざすビッグバンドにするために、必要とされる音楽の要素を、視聴によって感じた子どもたちの感想のなかから厳選し、印象に残った表現をキーワードで板書し、全体で確認した（資料2）。

#### 【板書より】

- ① テンポ…自分達より速く演奏されている。
- ② ハキハキしている…曲にメリハリがあり、強弱の表現がなされている。
- ③ ソロがある…トランペット・サクソ・トロンボーンなどが印象に残る。
- ④ 一人一人が主役…それぞれが堂々と演奏していて、楽しそう。息が合っている。
- ⑤ 切るとのぼす…スタカートやレガートの表現がはっきりしている。
- ⑥ 観客のノリがいい…手拍子が裏打ちで、スウィングを感じている。
- ⑦ 雰囲気…演奏のノリがよくて、テンションが高い。
- ⑧ 簡単そうに演奏している…よく練習してあり、暗譜している。
- ⑨ 動作がある…楽器を上下左右に動かしたりして、表現している。
- ⑩ 楽器の編成…ビッグバンドの楽器の編成がわかった。
- ⑪ ここはあの音・そこはあの音…いろんな楽器が主旋律をつないでいる。

#### 資料2 映画を視聴して印象に残った音楽表現

子どもは映像の演奏と自分達の鍵盤の演奏とを比較し、圧倒的な違いを感じていた。また、この映像から受けた感動は、この楽曲をよりよい演奏表現にしたいという思いを強くし、子どもの話し合いにおいても、さらに問いがつながる手だてとなった。第三次では、子どもなりのビッグバンドをめざして、映画「SWING GIRLS」から印象に残った表現の中



資料3 動作を取り入れた演奏演技

で、取り入れたいことを3つ選び、自分たちのチームの仕掛けとし、動作化を取り入れた演奏表現に取り組んだ（資料3）。心動かされる音楽との出会いは、自分たちが取り組んでいる楽曲にあらたな感動を与え、創造する意欲をかきたてた。仕掛けをひみつにすることで、鑑賞者には、演奏表現がはっきり伝わることを意識させて取り組ませた。そのことが、子どもの意識の中で、問いがつながる手だてとなった。

また、楽曲から受けた影響を自分たちの演奏表現を生かすために、くり返し映像を見直し、自分たちの表現に生かす姿がみられた。

### (3) 学習形態の工夫をする

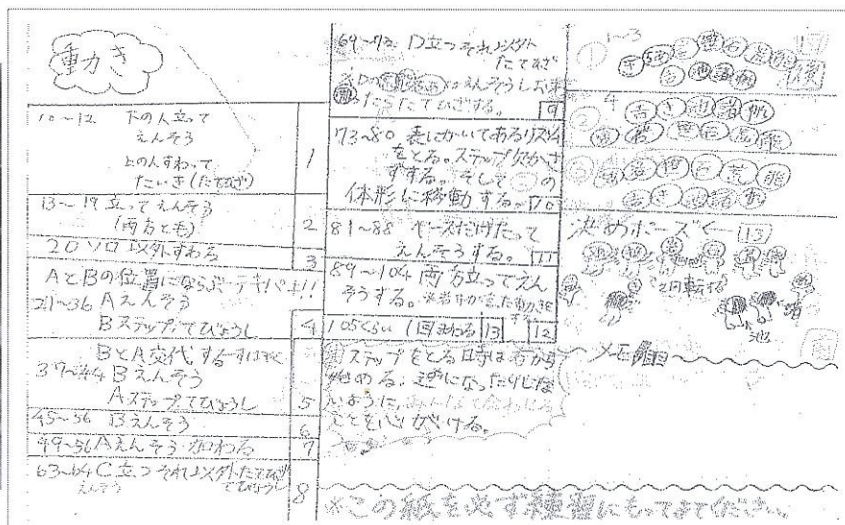
#### 5年「ビッグバンドをめざそう」の実践から

この題材では、子どもなりのビッグバンドの演奏を目指し、『シング シング シング』の曲想を生かした表現の工夫をさせた。まず、練習場所や話し合う時間の確保などの環境を考え、3チームに編成することが適当だと判断した。その上で、各チームの演奏技能の差がつかないこと、メンバーの男女比、特に本題材では、イメージの共有化ができるメンバーである等を考慮し、バランスのいいメンバー構成にすることを意識した。

また、子どもは、演奏演技では、動作化を取り入れることを一番に望んでいたもので、話し合う時間を確保し、チームの考えをまとめさせた(資料4)。問いがつながり、学習の課題にせまるには、各学級が最終的にどんな演奏演技にたどり着きたいかを共有するために、「5の2のノッテノッテのりまくれ」のような学級の表現のめあてをたて、3チームがそのイメージに向かって、思いや意図をもった表現活動に取り組んだ。学習形態が生かされて、問いがつながり、学習の課題にせまるために、イメージを共有することを意識させた学習形態をとったことにより、創作活動が活発化した(資料5)。また、各チームの表現を鑑賞する場においても、チームの仲間と共通の思いをもっていることは、学習課題に迫り、問いがつながる手だてとしては有効であった。



資料4 チームの考えをまとめる様子



資料5 動作化を考えたコンテ

### 5 今後に向けて

問いがつながる音楽科の授業をめざすには、その学習において、子どもの思考を何らかの方法で知ることが大切だと感じた。

学習のふり返りの感想を読むと、この手だてが有効であったかが、はっきりと子どもの言葉で伝わってくる。そのことをもとに、子どもたちが学習のはじめに設定したゴールに向かわせるために、子どもの思考を教師が正しくキャッチして、授業の軌道修正をしていくことが特に重要だと感じた。そのためには、子どもの思考がわかる方法を、その題材に合わせて準備し、「問いがつながる授業」への手だてに合った形として実行していく必要がある。

次に、意欲が持続し、子どもの知的好奇心を満たす授業を構想することが重要だと感じている。音楽科では、楽曲をくり返し演奏する、鑑賞することで、楽曲の良さや構造を徐々に知ることができ、演奏のレベルが上昇し、理解度が増す。そのためには、意欲が維持でき、子どもの心に感動をもたらす音楽を選択して、出合わせなくてはならない。また、子どもの問いがつながるには、場の設定を柔軟に考えていくことが必要だと考えている。